

早出町の由来とあゆみ

町の歴史については、町内在住の川井春雄様が中心になって編集された文化誌等（早出のあゆみ）があり、これを参考にして抜粋させていただきました。郷土に寄せる思いと先人達への畏敬の念の深さには本当に頭がさがります。記録として残していただいたことに心から感謝申し上げますとともに、次の世代へしっかりと繋いでいかねばと考え、ホームページに活用させていただきました。

1. この地に人が住み始めたのはいつ頃からか

昔の庄屋に残されていた古文書、お宮やお寺の調査からでは約550年前からとみられます。時代としては応仁の乱の頃となります。

当時、この地は川跡や河原で湿地帯であり、荒れ地を開墾して良田とするには朝に星を仰ぎ、夜に月を見るほどに朝早くから晩まで野良仕事に励まなければならなかったため、その勤勉ぶりを見て周りの村人が早出村と呼んだとも言われており、開拓者の血と汗の結晶により今日の早出があります。

新田開発にあたっては、現在の上組（字）である北側のエリアで始まったようです。村人が一体になっての共同作業ですからまとまる為の信仰が大事にされ、そこで氏神様が祀られることになり、疫病や禍を防ぎ、また収穫の感謝の祈りを捧げたようです。上組にお宮があるのはそのためです。

なお町内にある二つの寺はもう少し年代が後になって建立されたようで、法盛院は430年前、玉傳（伝）寺は460年前と寺歴にあるようです。

2. 早出村の名前の正確な記録

早出の名前が歴史（古文書）の上に現れるのは約430年前で、家康の家来であった江間与右衛門一成が知行目録を拝領した際に、「早田村一円」と書かれてあったようです。

語源的には、「早」は「サ」、「田」は「デン」と呼び、稲作関係の言葉らしく、田の神を意味するものであったようです。例えばサツキは田植え月である陰暦の五月、サオトメ（早乙女）は田の神に奉仕する聖なる乙女、サナエ（早苗）は田の神が宿り豊作となるよう念じるなど、田の神に少しでも早く近づきたいという気持ちが込められていて、これがいつしか早出「サデ」になったようです。

※ 江間与右衛門一成について

江間氏は飛驒の出身ながら引馬城主の飯尾豊前の守に仕えるようになり、島之郷（十軒、早出、上島、本郷、金屋、三浦、阿弥陀あたりの一帯がそう呼ばれていて、ちなみに遠鉄曳馬の駅は昭和26年まで島之郷駅と呼ばれていた）を治めていたのが引馬城家老の江間加賀の守時成であった。一成は加賀の守時成の子で、父が暗殺された後は本田忠勝により保護され、家康の家来となって、加賀の守の旧所領を拝領している。

江間家が使用したと伝えられる井戸が現存しており、上西組の川井家宅はその屋敷跡として昭和61年に石碑が建てられています。

3. その後の新田開発

林組・新田組・下屋敷組の開墾も続き、元和8年（1622年）には林組が当時の浜松城主（高力撰津の守）に願ひ出ている記録があり、誰が、どのように関係したかが書かれているようです。南公民館の南側には石碑が残っており、市兵衛、久嶋弥作、権三郎、市兵、善吉、九八郎の六人の名前や、開発ができた時には年貢米40俵を納めること、また、市兵衛新田と名付けて欲しいことなどが刻まれています。

現在の新田組の開発は前述のような確かな記録は残っていませんが、墓碑からの推定で大野木姓の一族で行われた模様です。

現在の下屋敷組の開発は久嶋一族や大野木一族による開発とは異なり、村人全体で行われたようですが、上組の人達がこの地を下の屋敷と呼んでいたことから字名として現在に続いているようです。ここでは、川井姓、中村姓、渡辺姓の集まりであったようで、今日、早出町に多い苗字であることが納得いくところです。

こうした取り組みにより地域は発展し、今から340年前の延宝年間の早出村の石高は248石、家数69戸、その後の元禄年間では488石と約2倍に増え、東海道浜松宿の助郷村になっています。

4. 早出村の文化と文化財

(1) 早出学校

江戸時代の鎖国により、諸外国の事情が分かっていた訳ですが、明治になって様々な点で遅れていることが分かり、教育の大切さを痛感した政府が全国に学校を作るように学制頒布を発令。これを受けて早出村でも明治7年に中村録郎、中村太郎三郎らが玉伝寺を借りて授業を開始し、明治9年には学校を建設しました。当時の村人の寄付で賄われ、大変な負担であったようです。

この早出学校が、後の曳馬小学校や上島小学校の前身であり、当時の校区は上池・下池・中沢・船越・野口・佐藤・馬込も含む広い範囲に及び、曳馬地域を越えた先駆的なもので大きな貢献を果たしていました。早出が教育に熱心な地域であったことが分かります。ちなみに、曳馬小学校は明治22年に現在地に移転し同26年に校名を改め、上島小学校は昭和9年に曳馬北文教場として移り同16年に校名を改めています。

こうした先人たちの努力は早出の発展に大いに役立つものであったことから誇りに思い、長く後世に伝えるために平成3年に玉伝寺東側の薬師様に石碑が建てられています。

(2) お薬師様

昔からお祀りしている薬師瑠璃光如来は、通称お薬師様と呼ばれています。伝説によると今から約350年前、細島村の吟京という和尚が薬師如来を祀っていたが目を患い、お祀りが出来なくなり早出で祀ることになったとのこと。

元禄16年（1703年）の古文書に「薬師堂二間四面無住村人総支配」とあり、村人全体で祀っていたことがうかがえる。病や苦しみから救ってくれる守り本尊として祀り、多くの人々が願掛けに訪れたらしい。戦後、荒廃が進む中、昭和59年に町民の寄付により改修・再建されています。

※ 薬師堂地獄絵図

80年ほど前に篠ヶ瀬村の鈴木白華氏が描いたもので、人間が悪事を働くと地獄に落ちると言われているが、その地獄を想像したもの。人の人生は善行も悪行もあり、より正しく生きることを教えたもので、このような絵図は世間に多くあるものではなく大変貴重なものである。

※ 西国三十三観音

関西地方の寺に祀られている観音様のことで、願掛けをして廻ることを巡礼といいます。巡礼ができない人のために村の有力者が各寺院からご身体を勧請したもの。ここを参拝すれば西国三十三観音を参拝したことになると信仰を集めた。明治の初期の頃とみられている。

(3) 秋葉灯と信仰

春野町にある秋葉山は火防（ひぶせ）の神として重んじられ、江戸時代から全国的に広まった秋葉山参りは秋葉信仰の象徴として大変人気を集めました。そのため秋葉山に通ずる街道には旅人の案内用に灯籠が建てられ、これを常夜燈といいます。早出町にも往時の姿を守りながら上組・中根組・下屋敷組・林組・新田組の大字ごとに残っており、平成に入ってから改築されたものもありますが美しいシルエットは変わることなく、それぞれの地域の人に大切に祀られています。町内では薬師様から北に向かう道が秋葉街道の一つであったとも言われています。

また、秋葉信仰と並んで奥山半僧坊信仰も盛んであり、その街道筋には灯籠だけでなく道標も建てられていましたから、上組と中根組に道標が残っているという事は早出村にも主要な道があったことを物語っています。

さらに、古くから願掛けとして地元で祀られているものも沢山残っており、上組の延命地蔵、下屋敷組の甲子（きのえね）様、林組の弘法様、新田組の千手観音などをみると独自の文化財をもち、これを祀る伝統行事があったものと思われています。

5. 明治から昭和にかけて

江戸時代後半から既に、この付近の地域では最大かつ豊かな村であり、明治に入ってから農業だけでなく加工食品も扱うようになり、味噌・酒・醤油などの販売をしていた記録があります。早出学校建設に尽力した中村太郎三郎らは後に三方原の開拓にもかかわり、徳川時代終了に伴い武士が始めた三方原の開拓を引き継ぎ、三方原の発展に貢献し、曳馬三方原組合村の村長も勤めています。三方原神社境内には貢献の顕彰碑が建てられており、早出村の存在が十分に認められたものであることがうかがえます。

明治に入って国のさまざまな制度が変わる中で早出の変遷としては、廃藩置県を受けて明治4年に浜松県、同9年に静岡県に合併されますが当時は遠江国敷知郡早出村と呼ばれており、同22年の市町村制実施により曳馬下村の大字、同24年に曳馬村大字、昭和9年に浜名郡曳馬町の大字に昇格している。同11年にはいよいよ浜松市と合併し、同15年に早出町になっています。

明治から昭和にかけての主な動きを列記すると次のようなものがあります。

明治30年	小学校の教科書国定化と共に、曳馬小に高等科が併設されて曳馬村立尋常小学校となる
同 37年	村人口が500人足らずにもかかわらず、日露戦争に15人従軍し4人が戦死、御魂（みたま）を祀る忠魂碑建立される
42年	遠州鉄道西鹿島線の前身である軽便鉄道スタート
大正 5年	白井医院開業
昭和 5年	久島医院開業
9年	ビスコース（旧、東京セロハン）操業
7年	早出八幡宮再建
15年	早出町となった時の隣保調べをみると、上組36戸、中根組29戸、下屋敷組15戸、林組14戸、新田組16戸
16年	馬込川が氾濫し田畑に大きな被害
19年	貉(むじな)川の治水事業により、現在の流れになる

※ 人口と戸数の推移

年 代	戸 数	人 口	(男)	(女)
承応 2年 (1653)	57	—	—	—
元禄16年 (1703)	81	462	236	326
宝暦 9年 (1759)	116	535	262	273
文化15年 (1818)	117	496	248	248
明治13年 (1880)	104	496	234	262
昭和15年 (1940)	110	656	—	—

6. 現在の早出町

馬込川にかかる十軒橋を東進して市野町のイオンモールに向かう道と、茄子橋から北に向かう道が町内の東西南北のメイン道路となり、北側は小池町、東側は中田町・丸塚町・上西町、南側は細島町、そして西側は十軒町と境を接し、馬込川中流東岸を南北に長く伸びた地域を占めています。

戦後の昭和24年には、市営バスの早出線運行が始まり、早出幼稚園も開園。27年には曳馬中学校（現高台中学）設立、35年にはヤマハ発動機の前身であった北川自動車操業し地域の雇用も広がっています。48年からは区画整理事業もスタートして住環境整備も格段に進み、54年には町内で初の大型スーパーであるさくらストアの開店（その後、松菱マート、マックスバリュ）ともなりました。これにより人口も45年には3000人を超え、63年には5600人余と大きく伸びてきました。

平成に入ってから、元年に下水道の整備による都市インフラの充実、5年に早出郵便局や7年にはJAとびあ早出支店開業が続き、暮らしを支える機能も整ってきたといえます。

こうした推移に併せて、地域住民の活動やコミュニティづくりとしては、昭和4

2年に八幡宮社務所を兼ねた北公民館が建設され、44年に子ども会、45年に老人クラブ、50年には自主防災隊、そして57年には全世帯の協力によって林南組の地区に南公民館が建設され、新たな活動拠点確立による住民活動の基礎づくりが整いました。

一方、町の求心力が高まるにつれて、長年の夢であった浜松まつりへの参加という目標への取り組みも始まり、中心的組織となる中堅会が設立され58年には早出連結成をみたのであり、平成2年には御殿屋台も完成しました。中田島砂丘には早出の凧が天高く上がり、市中心部で行われる屋台の引き回しにも堂々たる姿を披露し、早出町の勢いを象徴するものとなりました。

昔は湿地帯荒れ地であった早出も今日では約3000世帯、人口7000人と大きな所帯となり、市内でも有数な町に発展してきています。あらためて先人達の奮闘に感謝と敬意を表し、今を生きる私達にはこの町を次世代へ繋いでいく責任があることを痛感します。

現在、地域を支える自治会は17の組(字)により構成される組織として様々な活動を行っており、住みやすく暮らしやすいまちづくり、安全安心なまちづくり、一人一人が輝き活躍していくまちづくりをめざして活動しています。

皆さんの一層のご理解ご協力をお願い申し上げます。

平成31年4月